

1、背景とねらい

アルファルファの定着のためには、刈取管理が重要な問題として指摘されている。特に播種当年並びに播種翌年における株数の低下は、アルファルファの定着の上で、大きな阻害要因となっている。今回播種年と播種翌年の秋期刈取管理が、株数、生育並びに収量に及ぼす影響について検討したので参考に供する。

2、技術の内容

1) 刈取時期による株数、並びに収量への影響

- (1) 最終刈取時期の違いによる株数、収量への影響は、高標高地、低標高地いずれにおいても認められる。特にその影響度合は、播種2年目に比べ、播種当年の方が顕著であり、また高標高地の方が影響が大きい。
- (2) 株数及び収量に及ぼす影響は、最終刈取1回前の刈取時期から最終刈取までの期間（以下最終刈取間隔とする）と密接な相関が認められ、最終刈取間隔が長い程、13℃以上の日の積算気温が高いほど、越冬率、翌春の収量は高まることが認められた。
- (3) 平均気温が13℃まで低下してきた時期から、おおむね10℃までの期間は、草丈伸長停滞する時期であり、根の貯蔵養分推移をみると刈取をすると低下するが、無刈取では高まり、この時期は越冬養分蓄積時期であることがうかがわれる。刈取間隔の期間の多少に関係するとともに、越冬率および収量に大きく影響することが認められた。

2) アルファルファ定着の望ましい最終刈取法

気温の推移から越冬率、並びに翌春1番草収量に影響をあたえない望ましい刈取管理するためには、次のように危険な時期をさけながら刈取管理する必要がある。

- (1) 播種当年は、最終番草の草丈は平均気温13℃になるまでに45cm以上確保出来ないときは無刈取のまま越冬させること。
- (2) 播種当年は、最終番草の生育日数は60日以上確保すること。
- (3) 2年次以降についても刈取危険帯の刈取を避けるが、高標高地についてはさらに平均気温13℃（刈取危険帯）低下時期までに、番草間の生育日数が不足しているときは、生育停止期までに60日以上確保するように刈取管理する。

3、指導上の留意事項

最終刈取間隔を十分に確保するには、刈取を計画的に行うことが大事で、播種年春播の場合は当然1番草は、開花1/10を前提にする。

秋期生育停止期までの遅刈は場合によっては降霜による落葉、枯死が目立ち減収するので注意する。

表 播種年並びに2年次における秋期刈取管理のめやす

把握項目	めやす	備考
刈取危険帯 (旬別平均気温)	・ 半旬平均気温が13℃に低下してきた時期から10℃まで低下する期間	生育が停滞してくる時期で、越冬養分の蓄積が行われてくるが、刈取したらまだ根の貯蔵養分が低下する時期でもある。
最終刈取間隔	・ 播種年は最終刈取間隔60日以上確保 ・ なお刈取危険帯の時期まで、60日以下の(草丈45cm以下)場合は無刈取 ・ 2年次からは刈取危険帯をさけ、生育停止期までの日数が60日以上確保している場合は、刈取可能	越冬率、翌年の収量は、刈取間隔と相関があり、またその期間の積算気温(13℃以上の日数)が多いほど高まる。 刈取危険帯の時期までに積算気温500℃(草丈45cm)以下では、越冬率が低下する

※ 高標高地では、経年留意する。

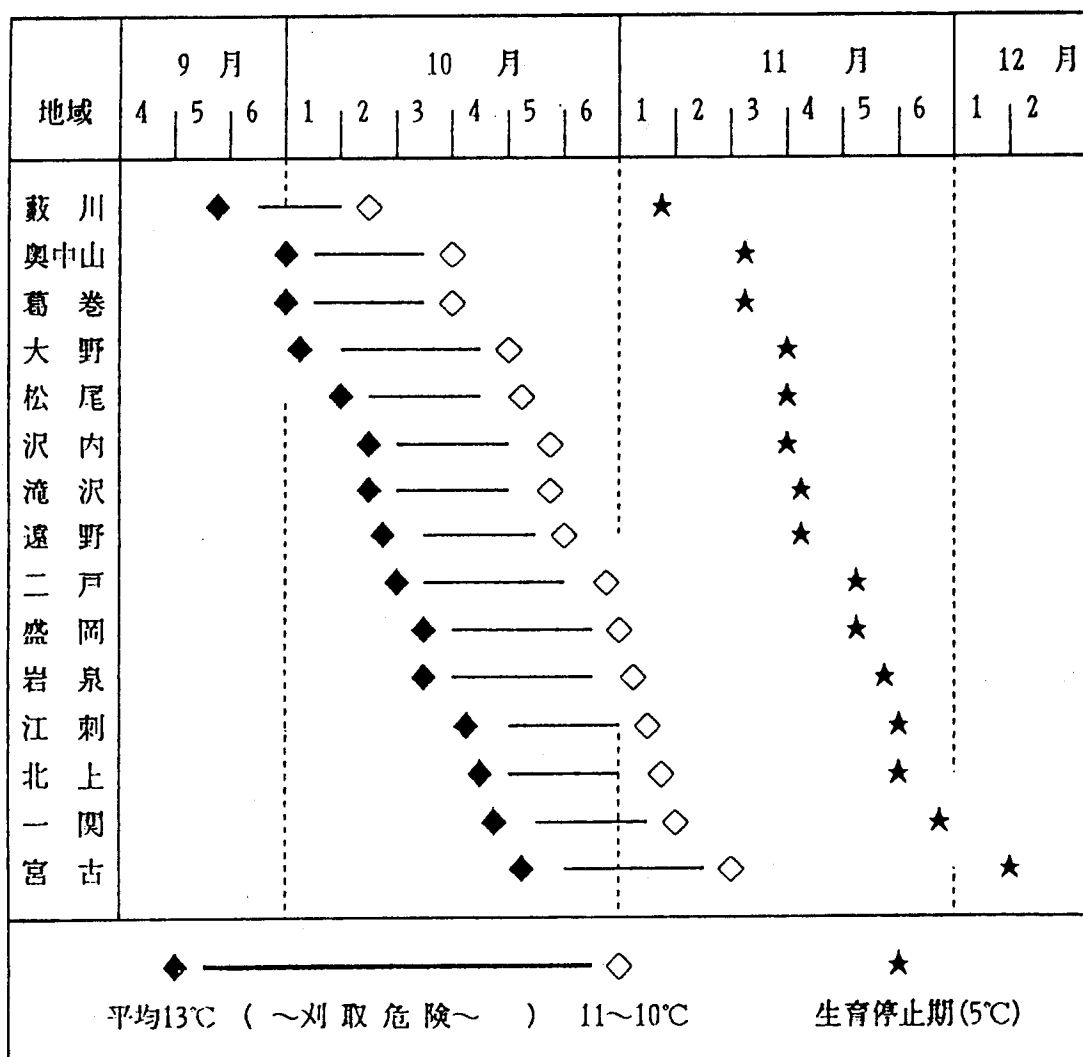


図 県内主要地域の秋期刈取危険帯(平年予測)